

ASC2010 参加報告

石川有三

ASC2010 ハノイ大会に参加するに当たり、地震学会 ASC 基金より渡航交通費と参加登録料を助成していただきました。関係者の皆さんに感謝いたします。大会参加の報告は、以下の通りです。

6日午後にハノイ入りし、7日に大会前研修で講義を行った。会場はベトナム科学・技術院。具体的には、15人ほどの研修生に Seis-PC の解説と実習を行うもので、各自自前のパソコン（OS は Windows7）を使い、インストールするところから始めた。参加者はパソコンの使用に慣れていて、午後の半日間でやや忙しかったが、ほとんどの機能について問題なく実習を行うことが出来た。インストールファイルのほかに最新の PDE カタログファイルもコピーして使って貰ったが、研修生は熱心で、自国の震源データを Seis-PC で使う方法や、地図データの活用の仕方など、具体的な質問が多くあった。研修の世話役であった地球物理研究所地震情報・津波警報センター副センター長の Nguyen Hong Phuong 准教授に要請されて、実習終了後の研修終了式にも立ち会った。研修終了後にも、ソフトを欲しいという依頼がメールなどで2件あり、現在 FTP サイトに置いていないため FileTruck を利用して送付した。

7日から大会で、開会式の後の Plenary Session で座長にされていたので、午前中座長を務めた。日本からは平原会長が南海トラフの新しいプロジェクトの紹介をした。中国の Ding 氏の報告は、Wenchuan 地震の余震の詳細再解析で竜門山断層の微細構造との対応を細かく示していた。イランの Dr. Mohammad Reza Gheitanchi はイランプレート地震活動を紹介した。

8日の夜、建築研国際地震工学部の卒業生と講師の懇親会が地球物理研究所であり、それにも出席した。

9日の午後は座長を担当するとともに小生の発表を行った。内容は、PDE 震源カタログの質的变化を指摘したものであったが、「地震統計をする人には必要な情報ですね」という好意的な反応であった。国際地震センター(ISC)の Dr.Dmitry Storchak と PDE カタログの問題を議論したが、ISC には事前に通知があったが USGS が決めたことに注文はつけないということであった。彼はそれ以降、PDE の中でヨーロッパの震源が激減したことに気が付いていた。小生に続いて発表した Wu Zhongliang 氏は相変わらず早口で、なかなか聞き取りにくかったが、震災時の人の動きをビデオで解析していたのは大変面白く、パワーポイントファイルをコピーさせて貰った。ベトナムの研究者の発表で Seis-PC を使った図があったのはうれしい限りであった。

大会終了後のエクスカッションは紅河断層のフィールドトリップがあり、これには自己負担で参加した。

今回は、火山の噴火のためインドネシアからの参加者がやっと最終日に間に合うという

トラブルがあった。また、次回 2012 年開催予定のモンゴルから初めて参加があったが、フィリピンからの参加が無かったのは残念であった。次回ウランバートル大会は、8月15日から18日と閉会式で発表された。



研修終了後の記念写真。小生の写真左が世話をした Nguyen Hong Phuong 准教授。



ASC2010 全体写真。